

---

# ストライクウィッチーズ ~鉄槌を下す王~

末期

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ ～鉄槌を下す王～

### 【Nコード】

N3485V

### 【作者名】

末期

### 【あらすじ】

異世界の中世において最大級の勢力を誇った「紅世の徒」の大軍団「とむらいの鐘」という組織トーマン・グロックがあった。

その組織の中枢たる「九？天秤」の一角、先手大将が一人……紅世の王「巖凱」ウルリクムミは「大戦」の最後で「震威の結い手」ゾフィー・サバリツシュに討滅されたが、彼を待っていたのは死ではなかった。

これは紅世の王と11人の魔女達が織りなす物語。

第一話 異世界（前書き）

よつじょといきょー伝説の始まり（ウン）

## 第一話 異世界

燃え盛る紅蓮の焰が咲き乱れ、怨嗟の音が満ちるは栄華を極めし人間の都が壊されて続けていた。

異形の黒い生命体      ネウロイに焼かれていくのは帝政カールスラント首都・ベルリン。

突如として始まったネウロイの大規模侵攻に栄えある都は蹂躪されつつあった。

ヨーロッパ屈指の軍事力を誇り、世界に栄華を誇るカールスラント帝国の精強なウィッチたちでも対応しきれない程のネウロイによる猛攻。

一般市民の避難を行いながら敵の侵攻を食い止めなければならぬという困難極まる戦況でありながらも、ウィッチ達は誰一人諦めようとはしない。

無残に焼かれていく故郷を見ながら、一人でも多くの命を救う為に。

そんな中、幼い少女は親とはぐれたのだろうか……………

くまのぬいぐるみを抱き締めながら一人で業火が咲き乱れる街を泣きながら歩いていた。

その上空で一人のウィッチによって撃ち落とされたネウロイの破片が、幼い少女に降りかかろうとしていた。

「……………！！クリス

ッ！！！！！！」

その事実気付いた一人のウィッチ、ゲルトルート・バルクホルンは全身全霊で間に合えと願いながら加速し

クリスと呼ばれた少女が自分を呼ぶ声に気がつくと同時に自分に降りかかる脅威に気付き、逃げようとするも少女の足では間に合う筈もなかった。

何の力もない幼き少女に手立てなどある筈もなく、ただ眼前に迫りくる白い破片を見つめる事しかできなかった。

（私、死んじゃうのかな…）

少女が死を受け入れかけ、くまのぬいぐるみが地に落ちた

その瞬間、一つの大きな光と共に巨大な『何か』が現れた。

（私、生きているの？）

少女

クリスは何故自分が生きているのか解らなかった。

しかしそんなこと気にならない。九死に一生を得たのだ、きっと自分の姉が助けてくれたに違いない。そう思い、恐る恐る周囲を見渡す。何故か周囲は薄暗く、燃え盛る炎の熱さが何かによって遮られている為にくりすは先ほどまで感じていた熱さを感じなかった。一体何故なのだろうと不思議に思い、見上げてみると

「え？」

それは城塞の壁の如き厚さの鉄で出来た『何か』だった。くりすを助けようとしたバルクホルンですら、驚愕のあまり声すら出ない。

「……な、なんなのアレは？」

「鉄の…巨人…？」

少女に降りかかっていた不幸を弾き飛ばし現れたのは、見るもの全てを圧倒する鉄の巨人。

異世界の中世において、最大級の勢力を誇った‘紅世の徒’の大軍団『とむらいの鐘』（トーテン・グロツケ）が誇る九？天秤の一角、先手大将が一人、愚かな物どもに鉄槌を下す紅世の王、巖凱、ウルリクムミが異世界に顕現した瞬間だった。

(……ここはああ、何処だああああ？)

周囲を見渡しても美女の顔の周囲に花卉がついている徒ともない 彼の副官であるアルラウネがいない。

戦場に立つ彼のそばを最後まで離れなかった彼女がいないのは奇妙な事であった。

討滅されたはずの我が身。それが何故このような場所に顕現しているのだろうか？

『壮拳』が潰えたのを確認した後で残存部隊を纏め、撤退する仮装バル舞踏会・マスケの軍勢に合流させるべく自ら踏み止まって敵の総大将と闘い、激しい戦闘の末に散った筈だ。

(奇妙な事もあるものだあああ)

討滅された瞬間、主君たる『棺の織り手』アシズや他の九？天秤達の元へと逝くかと思っただが。

予想に反して目覚めたのは 燃え盛る、見知らぬ街の中だった。

そして目の前にいるのは見知らぬ装備を見つけた人間達。

足元にも幼き人間がいるが、彼女たちは驚愕したままこちらを見ている。

気配からして『討滅の道具』フレイムヘイスではないが似て非なる力を持っているようだった。

同じような気配が広い範囲に点在している点、加えて統制がとれていると察せる事から組織に属するのだろうか……

「……なんだああ、貴様らはあああ？」

「私の名前はエーリカ・ハルトマン。貴方の名前はなんていうの？」

「……我が名は『巖凱』ウルリクムミというつづ」

エーリカと名乗った少女が物怖じせずウルリクムミに話しかけているのを見て、他のウィッチの二人　ゲルトルート・バルクホルンとミーナ・ディートリンデ・ヴィルケという　も警戒を解いた。

「ありがとう、ウルリクムミ。あの子を救ってくれて」

「私からも言わせてくれ……妹を救ってくれてありがとう」

「本当に、ありがとうございます」

エーリカを切っ掛けに少女達から感謝され、足元に居る少女の事かと推測する。

他の『徒』なら見捨てるか食べる所だろう。

しかし『人間』は弱い種族であるが、『紅世の徒』とさほど変わりが無い種族だという認識である。

そんな考えを持つウルリクムミにとっては、何の罪もない存在が殺されるのを容認することなどしよははずもない。

他の九？天秤達は食料扱いしていたようだが、彼は人間とフレイム

ヘイズは別個に考えている。  
そんな彼がフレイムヘイズ達を『物扱い』しているのは、フレイムヘイズ達が根拠も曖昧かつ一方的な危機感で同胞達（紅世の徒）を殺してきたからである。

理路整然とした説明や根拠さえあれば彼とて納得のしようもあつただろう。

しかしそれらが無い故に、同胞達に優しいウルリクムミは憤りを禁じ得なかつたのだ。

だからこそ『壮拳』は彼にとって、人間と紅世の徒が共生する為のきっかけになる輝かしい希望だつたのだ。

そんな心優しい彼だから、故郷を焼かれながらも懸命に応戦する少女達を物扱いせず、『対等の存在』として接する。

「別に大したことではないいい……それよりお前に聞きたい事があるのだがああ、この街を攻撃している黒いアレは何だああ？」  
「ネウロイの事を知らないの？」  
「ネウロイ、だとおおお？」

ネウロイ。

1939年に突如世界各地に出没し、世界中を攻撃し始めた謎の生命体である。

圧倒的な攻撃力と驚異的な再生能力を持ち、加えて『瘴気』を出す為には通常の軍隊では遠距離からの砲撃しか対抗手段がない。

その為、瞬く間に人類はネウロイに各地を侵略されてしまっている。唯一対抗できるのがネウロイが弱点とする『魔法力』を行使できるウィッチ魔女。

世界各地にウィッチーズが組織され、対ネウロイ戦の要として日々

戦っている。

彼女達から首都から避難する一般人やその護衛の友軍を支援する為にネウロイと交戦している途中、光と共に貴方が現れたと説明された。

ネウロイとやらがこの街を焼き払っている元凶らしい。

ウルリクムミは色々と聴きたい事が出来たが        その為にも為すべき事が出来た。

「まずはあああ、この街に居るネウロイとやらを掃討せねばならぬ  
ううう」

「…もしかして、協力してくれるの？」

「何故我が此処に居るのかあああ、その事も含め解らぬ事が多すぎる故えええ…ここはお前達に協力しようではないかあああ」

彼が単独でも闘い様があるうが、彼の本領は圧倒的な統率力と類稀なる卓越した戦術眼からなる軍勢の指揮である。

また、ここで単独で暴れてしまえば周囲の軍勢（ウィッチ達）を敵に回してしまう事にも繋がりがねない。

そのような愚行を起こすよりも、彼女達に協力した方が得策であるとウルリクムミは考えていた。

そうした点からウルリクムミは感情論からではなく、指揮官として

現状把握すべくウィッチ達と共に闘う事を決める。

「まずは俺がネウロイに攻撃を加ええええ、敵を引き付け時間を稼ぐうつつ……その間に貴公らはその娘を避難させよおおお」

ウルリクムミは自身が囷になると共に、非戦闘員の避難を提案する。しかしクリスを助けてくれた恩人？も避難して欲しいミーナは説得を試みる。

「貴方も避難をしてください、この場は私達が　この反応!？」

「くそ、まだアレだけの数のネウロイが居たのか!」

ここに来るまでに相当数のネウロイを撃墜してきた三人だったが、ミーナが感じ取ったネウロイの数は30を超えている。

流石に拙いと感じ取った三人は決死の覚悟でクリスとウルリクムミを避難させようとしたものの、間を置かずにネウロイ達は攻撃を開始した。

「ちょ、これはキツイかな……!」

「弱音を吐くなハルトマン!この場を抑えねばクリス達がやられるんだぞ……!」

その攻撃はもはや弾幕と違っていいほどであり、バルクホルン達も必死に応戦するものの……漏れた攻撃が破壊をまき散らす為に次々に降り注ぐ。

そしてクリスに再び死の危険が訪れようとした瞬間、突如として竜巻が湧き起こった。

クリスのみならず空で戦う三人のウィッチ達もネウロイの攻撃から守るように吹き荒れながら、勢いを増し続ける濃紺色の不自然な竜巻。

街に散乱する瓦礫を巻き込みながら速度を増し続け吹き荒れる竜巻なのにも関わらず、少女達には一切の影響が無かった。

それを発生させているのは　　‘巖凱’だった。

「我が『ネサの鉄槌』にてええええ……朽ちて消え行け、ネウロイ共おお……！」

その声に秘められた意思を自在法『ネサの鉄槌』に込め、ウルリクムミはネウロイ達に裁きの鉄槌を下す。

「ウィッチ達よおお、散れええええええ……！」

言われるがままに散開した三人の傍を圧倒的質量を伴った竜巻が吹

き荒れながら通り過ぎ、ネウロイ達に直撃した。

次の瞬間に三人とクリスが目にしたのは、ダイヤモンドダストの様に舞う白いネウロイの破片が空を彩るといふ光景だった。

30を超えていたネウロイは跡形もなく粉碎され、吹き荒れた竜巻によって周囲で燃え盛っていた焰も吹き飛ばされていた。

「……………」

驚きのあまり、無言になってしまふ三人。

対照的にクリスが「巨人さん、すごい！」と言いながらはしゃいでいるのを内心苦笑しながら、ウルリクムミは違和感を感じていた。

（これはどうということだろうかあああ？）

自在法とは‘存在の力’を元にして行使される術であるが、『ネサの鉄槌』を行使した際に慣れ親しんだ‘存在の力’ではなく別の力が使われていたのを気にしていた。

その力はウィッチ達から感じる何かと同じもののような波動をしているのだが……

そんな事よりも

「……………俺の手に乗れえええ、少女よおおお」

周囲にネウロイの反応が無い事を確認したウルリクムミは、手をクリスの前に下ろして乗るように促す。

手を差し出されたクリスは嬉しそうにしながら手に乗った。

それを見て呆然としていた三人も我に帰り、慌てて二人？を追いかける。

夜空の星々に優しく見守られながら、ウルリクムミは自分の掌で笑みを浮かべている少女を安全な所へ避難させるべく移動を開始する。

新たな闘いに身を投じる事を予感しながら、ウルリクムミは新たな世界での生を歩み始めた。

第一話 異世界（後書き）

へカデーを超だしたいが、かなり難しい予感

第二話 ‘先手大将’ (前書き)

いい幼女が見当たらない…

## 第二話 ‘先手大将’

ベルリンがネウロイの攻撃を受けてから5日が経過した。

その日、ラジオの前には多くのカールスラント人がいた。

避難中の市民や次のネウロイの攻勢に備える為の軍議をしていたウイッチ達は、食い入る様にラジオから流れる音声に聴き入っていた。

ある者は泣き崩れ、またある者は悔しさに身を震わせながら。

カールスラント皇帝フリードリヒ4世が自らラジオ放送を通じて、国民に対してある決定を通知した。

### 首都・ベルリンを放棄する

現有戦力で防衛する事は不可能ではなかったが、『機材・人材双方共に甚大な被害を受けてしまっている現状で戦線を維持するのは困難』との見方が幕僚会議にて大勢を占め、その意見にフリードリヒ4世も同意。

結果として帝政カールスラント首脳部は首都・ベルリンの放棄の判断に踏み切った。

この判断には多くの反対意見もあつたものの、フリードリヒ4世の『首都よりも国民を守れ』との命により首都放棄を決定。

加えて大規模な撤退作戦『ビフレスト作戦』の草案を作成するべく、軍上層部は現状を知る為に情報を集めていた。

そうして状況把握が進むにつれ、次々に大きな問題が判明してきていた。

特に大きな問題なのが戦闘可能なウィッチの総数である。

有能なウィッチは多く存命していたが、肝心要のストライカーユニットを保管していた倉庫の多くが破壊されてしまったのだ。

航空戦闘可能なウィッチの絶対数が存命する航空ウィッチに対して6割ほどと大幅な戦力ダウンを強いられている。

加えて大量の避難民を護衛するのに必要な戦力を割り振ると、実際に動かせるウィッチの数は5〜6割程度になってしまうので満足に作戦を展開する事が難しい。

また通常戦力である戦車や航空機なども配備総数の5割以上が実戦で使用不可能な為、満足な支援も行えない有様だった。

さらに首都ベルリンからの避難民の数は数十万人にも上ることに加えて、全市民の避難する為の移動手段や食料などの確保も大きな問題となっていた。

しかし、それらとは別個の『ある問題』が皇帝のみならず軍上層部を悩ませることになっていようとは誰も思いもよらなかったのである。

s i d e : ガラント

首都ベルリンの放棄が決定され司令部があわただしくなる中、私

アドルフフィーネ・ガラントは廊下に足音を響かせながら足早に歩いていた。

ヒスパニアで怪異が発生して以降、陸戦ウィッチとして数々の戦場で暴れまわったので積み上げた戦果は著しいものとなっていた。

その内にカールスラントのエースの一人に数えられるようになってた私は扶桑海事変以降、航空ウィッチに憧れを強め航空師団への転属をいくら棄却されつつづけても上申し続けた。

その間に司令部から任命された対地支援部隊設立の乗員訓練と組織作りに従事し、組織作りとウィッチ育成の経験を積んでいた。

現場で培った指揮・状況判断能力と組織作りによる経験は私の視野を一段と広げ、カールスラントが置かれている戦況の深刻さを現場に居るウィッチの誰よりも理解出来る様になった。

それ故に私は皇帝陛下に『ある事』を進言しようとしている。

(あれほどの力……活かさなければこの国に未来はない)

カールスラントが直面する多くの問題、そして今回の被害状況。それらの情報を精査していく内に……とある一枚の報告書が私の目にとまったからだ。それは軍議で最も議論が紛糾した『ある問題』の中心人物に関する物だった。

『ネウロイを圧倒する異邦人　　‘巖凱’ウルリクムミ　について』

彼の身体の特徴は『体の全てが鉄で出来ている』事であり、その威容は其の真名が占める通り『戦勝を捧げる巨大な岩山』に相応しいものである。

勇猛果敢に敵に挑む姿は味方を鼓舞し、その指揮・統率力は類を見ないほど卓越したものである事はこれまでの戦闘記録（僅かな間にネウロイを合計80機以上撃墜したこと）を見れば明らかである。

加えて30体以上いたネウロイを一撃で殲滅した強力無比な『ネサの鉄槌』という攻撃を行使する。

それは『自在法』という魔法とは異なる物のようで、本来ならば『存在の力』という魔力とは違う力を行使するとの事。

しかし、彼がネサの鉄槌を使用した時に感知されたのは魔力で在ったとの報告が在る。

情報の齟齬が認められる為、彼の協力を得た上での検証が必要と思われる。

彼は民間人の少女とカールスラント軍所属のウィッチ三名をネウロイ達から救った事に加えて、戦闘中に視界を遮られた事により被弾しかけたグンドユラ・ラル中尉を身を挺して守り切るなどの行為を行った。

その事から信頼できる人格であると推察される。

現時点でベルリンから徐々に避難する市民やその護衛部隊を支援するべく、ネウロイとの闘いに参戦する旨をこちらに通達した後はウィッチ達と共に戦場にて戦っているとの事。

その戦闘力と巧みな指揮によってカールスラント軍を支援、優れた戦果をあげていることからも国益に利する存在である可能性あり。

しかしネウロイを上回る脅威ともなる可能性も否定できない為に警戒を必要とする意見もあるので、対応は慎重にする事が求められる。

本来ならば突然現れた異形の存在など警戒するのだろう。

異世界から来た存在ではネウロイという悪い例もある為、当初は軍上層部でも意見が割れていた。

報告書通りの戦力ならば……何とか軍に取り込んだ方がいい。

何を言うか、結局はネウロイと同様の異世界から来た化物ではないか。

あまりにウルリクムミの話した内容が突拍子もない為、本来ならば受け入れられる事すらないだろうと私は思う。

しかし帝政カールスラントが置かれている状況は厳しく、既に国土の半分以上が攻め落とされ首都ベルリンも防衛する事が困難になりつつある最中　突如、戦場に現れた鉄の巨人。

その鉄の巨人とウィッチ達の獅子奮迅の活躍により想定されていたよりも被害は軽微だったに加えて、彼は既に高い戦果をあげている為に無下にできない現実が在った。

連合を通じて諸外国からの援助の申し出が始まっていたが、彼が現れてから数日が経過している為にウルリクムミに関しての情報を得ようとしたら彼自身に接触しようとする動きもある。

(ここで迂闊に彼を討伐するような動きを見せれば、我が国は外交上の問題を生み出すと共に権威を失墜させてしまいかねない…)

そついう意味でも彼は目立つが、視覚的な意味でも目立ってしまっていた。

かなりの巨体(推定身長30メートル程度)なので匿う大規模な施設が現在ないのに加え、大規模攻撃である『ネサの鉄槌』による多数のネウロイ撃破が予想外に多くのウィッチに見られていたのだ。

またクリスという少女を避難所に誘導した際、カールスラントの人々の中に目撃していた人も多かったのも目立ってしまった要因の一つと言えよう。

ウルリクムミの姿を見た当初は、人々はその威容に驚愕し恐れ慄いた。

しかし、とある少女とウィッチ達が目の前の存在によって救われた事を知るや否や 『畏怖の対象』から『希望の象徴』へと徐々に変わっていったと報告を受けている。

報告書を読み進めていく内に私自身がそう思ってしまうようになったので、一般市民がそう思ってしまうのも無理もないだろう。

彼自身の性格 温厚かつ公明正大、頭脳明晰でありながら驕らぬ慎み深い性格 もカールスラントの人々に受け入れられやすかった。

加えて戦場における彼の勇猛無比な姿。 果敢な決断力と類稀なる戦術眼から生まれる圧倒的な戦果。

それらはネウロイの脅威に怯える一般市民にとってウィッチ以上に解り易い『象徴』にしやすかったのだろう……

彼の戦いぶりが報道される度に人々はウルリクムミに希望を見出すようになっていき、徐々にカールスラントの人々からウィッチと並ぶ希望の象徴として受け入れられるようになりつつあった。

また現場のウィッチ達からも支持を集めており、その戦闘力を鑑みても…これからの反攻作戦において要になることは想像に難くない。それらの点を踏まえて、私は皇帝陛下にウルリクムミの協力申し出を受領すべきと直訴するつもりでいた。その為に先ずする事といったらアレだろう。

「……やはり上層部に殴り込むとするか」

それには色々と武器が必要だ、色々。

side:ラル

ベルリンからの撤退が決定してから市民の避難が始まるとほぼ同時刻、カールスラントのベルリン撤退を察知したと思われるネウロイ達の進撃が開始された。

数の暴力による破壊と瘴気を撒き散らしながら人間を根絶やしにせんとばかりに暴れるネウロイに対して、ウィッチーズも人々を守る

べく奮戦しており一進一退の戦況となっている。

そんな中、一際目立つ戦果をあげるウィッチを脅威と判断したのか…ネウロイ達はそのウィッチこと私に襲いかかってきた。

「数できたか……そこなくちゃね」

他のウィッチだったら表情が強張ってしまっただろうが、私は笑みを浮かべながらネウロイ達を迎撃する。

その闘う様と撃墜されたネウロイの破片が空に舞う様は、まるで戦女神であるかのような印象を抱かせると報じられた事がある。

あらゆる角度からネウロイ達から攻撃されつつ接敵して  
時折、  
ビームがシールドを貫通し身体を掠めるのを感じながら  
カウ  
ンター攻撃で的確にネウロイのコアに銃弾を撃ち込み、撃墜してい  
く。

私の戦い方は同僚達から危険だと常々言われ、上官からも戦法の変更をするように幾度となく勧告されたこともある。

（それはそうだろうな…非常識な戦い方だし）

敵に接近し故意に攻撃されながら、隙を見てカウンターを決めると  
いう一歩間違えば死ぬ危険性が高い戦法。

端から見れば自殺志願者の特攻と思われても仕方がない闘い方なの

で（後に映像記録を見せてもらったら、不覚にも自分自身がそう思っ  
てしまった）、反論しようがない。

他の戦法も試みたものの……あの闘い方が一番、性に合っていると  
解った為に変更するつもりもなかった。

「ラル中尉、私の分も残してくださいよ！」

「わかってるさ、リーケ！」

最近ペアを組んだばかりながら相性がよく、私の闘い方にもついて  
これる頼もしい相棒となったリーケ・ザクセンベルク軍曹と阿吽の  
呼吸でネウロイを撃墜していく。

いつにもまして数が多いネウロイに手こずってしまふものの、小型  
ネウロイを多数撃破した。しかし、その影響で空中に舞う  
数多のネウロイの破片で視界を遮られてしまった。

無防備になった刹那、一機の小型ネウロイが私に狙いを定めたの  
を見た。

「！しまっ  
」

気付いた瞬間に反射的に身構え目をつむってしまい、死を覚悟した  
……しかし、ネウロイの攻撃が私の身体に届く事はなかった。

次の瞬間眼をあけると、そこには私を死の淵から救った分厚い鉄で

できた右手が高々と掲げられていた。  
その鉄の手を見て、私は思わず笑みをこぼしてしまった。

(ホントこういう時に助けてくれるな、お前は…)

「戦場では僅かな隙が死につながる故えええ、常に気をつけること  
だあああ」

「助かったよ…この借りは今度返す！」  
「構わぬうつつ、戦友を助けるのは当然のことだからなあああ」

私の危機を救ってくれたのは鉄の巨人、ウルリクムミだった。

私は彼？と出会った時に眼を見開いて驚愕しまったものだ。  
鋭い人物観察眼をもつ私はエーリ力達と交わされる会話から直ぐに  
ウルリクムミを信頼できると推測し、また自分も会話してそれを確  
信した。

2日前に撃墜したネウロイの破片に視界を遮られ無防備になった瞬  
間を狙い撃ちされそうになったが、私は彼によって助けられた。  
彼がその身を盾にして守ってくれた事から信頼するようになり、ま

た自分のみならず他のウィッチも『戦友達』と呼び、守り抜こうと  
している姿に見惚れてしまった事もある。

危機に対しては自らの体を盾にして味方の活路を切り開くだけでな  
く、その存在感で味方に平常心を齎す頼もしさと威容は風格を醸し  
出しているので、前戦で戦うウィッチ達から 特に陸戦ウイ  
ッチ達から『先手大将』と呼ばれ始めているらしい。

そんな彼と共に闘う事は私にとってかけがえのないモノになる事は、  
僅かながら予想できていた。

ネウロイによって故郷ガゲナウを奪われ、さらに母を失ったことで  
傷ついた私の心は彼に対する温かい気持ちで満たれつつあるだから…  
その事を自覚しつつも、頼もしき相棒リーケと『巖凱』と共に私は  
今日もネウロイと闘う。

「ネウロイの攻勢が崩れたかあああ……魔女達よおお、我に続け  
ええええええ！！！！」

いつの日か、亡き母に故郷ガゲナウの復興報告をする事を夢見なが  
ら…

## 第二話 ‘先手大将’ (後書き)

無意識のうちにラルさんフラグを立てた？ウルリクムミ、そして登場しましたガランドさんとラルさん&リーケさん。

カールスラントのウィッチは、私好きなキャラが多すぎて困る。

**キャラクター&独自設定**

**(話の進行により更新する事あり)**

**(前書き)**

情報整理がてら掲載します

**キャラクター&独自設定** (話の進行により更新する事あり)

本二次作品の主人公からいきます。

『巖凱』ウルリクムミ

原作：灼眼のシャナ (10巻、灼眼のシャナS『キープセイク』に登場)

筆者お気に入りの紅世の王。

「とむらいの鐘」によって建造されたブロッケン要塞に入場行進する際、『自分は巨体で邪魔だから最後でいい』と言う程に何事に対しても憤み深い性格。

その際、同僚の小競り合いを見越して自分を最後にするあたり…細やかな配慮も出来る漢といえる。

普段は温厚な性格で、頭脳明晰かつ戦術眼も確かな名将にして猛将。兵士たちを『戦友たち』と呼び、敗北後も一人でも多く部下を活かす為に関係最悪の敵と闘い散ったことから義に篤く部下を大切にしている事が窺える。

さらに公明正大な所もあるってんだから、こんな上司がいたらと思わざるを得ない。

気が付いたらカールスラントの人達から尊崇を集めている存在にな

っている。  
そりゃ絶望しかけてた所に絶望を圧倒する対象が現れたらそうなるか。

因みに鉄の体ですが自在法による強化が施されているので、普通の鉄とは違いネウロイのビームを余裕で弾きます（独自設定）。

さらに自在法で動きそのものを強化してあるので機動力もあります。これは原作で広い戦場を移動していた事、加えて『大戦』の折に自分の体を盾にして単身前戦突破を敢行していた事から設定。

一定以上の破壊力がある魔法や物理攻撃ならダメージ与えられなくもない。

しかし魔法でダメージを与える場合は城塞を一撃で破壊できる程度の威力が必要となる為、彼相手にそんなことできるのはカツコイお姉ちゃん（妹LOVEモード）ぐらい。

戦闘中のイメージは『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』に出てくるデストロイ。

イメージBGMはヴァルキリープロファイルの『殺戮言語永久機関』です。

正直強化しすぎたか、と思わないでもない。

以下のキャラは原作は『ストライクウィッチーズ』です。

ミーナ、バルクホルン、ハルトマン

ほぼ原作どおり。

違うのは、バルクホルンはクリスを助けてもらった事からウルリクムミに恩義を感じているくらい。

32

グンドユラ・ラル

作者の都合により色々と原作から変わっている人。

母親の件やら出身地の件やら…ホントにあってるのか不明。

うん、変えるの面倒だからこのまま独自設定という事で行きます)  
マテ

本作品中での彼女の戦法ですが、完全に作者の思い付きです。

気が付いたらヒロインになりそうな感じになっている人…まあ、命を助けられたり精神的に救われたりとフラグを立てられているので

しょうがない。

リーケ・ザクセンベルク

Wikiにあまり情報が載っていない事をいい事に、作者によって捏造設定の嵐に巻き込まれた不遇の人。

イメージモデルの『ハインツ・ザクセンベルグ』さんは中々面白い逸話がある軍人。

その逸話は作中で再現したい。

アドルフイーネ・ガランド

この人はあまり原作と変わらず。

案外『九？天秤』のフワワあたりと会話させたら面白いかもしれないが、フワワ自体が登場しないのが残念。出来ればもっと登場させたいが、中々出し難いお気に入りキャラ。

**キャラクター&独自設定** (話の進行により更新する事あり) (後書き)

今は少ないですが、話の進行によって追加されていく予定。

第三話 ビフレスト作戦 上(前書き)

あとで改稿します。

### 第三話 ビフレスト作戦 上

side：皇帝

ついに『ビフレスト作戦』が開始された。

カールスラント軍首脳部は数十万人にも上る避難民と皇帝一家を護衛する部隊と、放棄されるベルリンでネウロイを食い止める部隊に分け部隊を配置させた。

ネウロイの戦力を分散させる狙いは見事に当たったが、ベルリンに多くのネウロイが向かっていると報告を受けたフリードリヒ4世の表情は優れなかった。

（あそこで、何人死んでいることが……）

作戦だという事は分かっている。必要不可欠だという事も、自分が死んでしまえばカールスラントの復興が大いに遠のく事も。

それでもフリードリヒ4世は、まだ恋も知らぬ年頃の少女たちを戦場に駆り立てておいて、‘大人’である自分たちが撤退している現実に憤りを禁じ得なかった。

（頼む。一人でも多く生き残ってくれ）

せめて一人でも多く生還させてくれと祈るほか、この時の彼が出来る事がなかった。

街から色彩豊かな人の彩が消え去り……戦禍の華が咲き乱れる世界がそこは広がっていた。  
ベルリンの街が再びネウロイによる戦禍に吞まれ、両軍入り乱れての戦闘。

それに伴う劫火に照らされる街の中で、命と命の競奏曲が響き渡っているのを聞きながらウルリクムミは頭の片隅で『大戦』を思い出していた。

(撤退戦かああ…大戦を思い出すなあああ)

彼は『とむらいの鐘』の先手大将として異世界で起こった『大戦』と呼ばれる戦争に参戦していた。

その戦でとむらいの鐘が目指した『壮拳』が潰えた後も、一人でも多くの部下を友軍に合流させるべく闘った過去が在る。

その時は組織の『先手大将』として暴れたのだが　この世界でも再び同じ呼称が広がるとは思ひもしなかった。

それが今や人間達と共に闘い、多くの戦友達も出来た。

(フレイムヘイズ達に恐れられた筈の自分が人間達と轡を並べて闘

おうとはあああ……世の中は解らないものだあああ)

ウルリクムミは感慨深げに思案にふけってしまいそうになるが、戦場に立つ以上は気を引き締めなければならない。

物思いにふけりそうになる思考を切り替え、眼下に広がる光景を見据える。

既にベルリンより市民の避難が開始されて数時間が経過しようとしており、予定よりも少々遅れているものの概ね順調であると報告を確認している。

(ともかく今は戦闘中だあああ、何としても作戦を成功させねばならぬううう)

ウルリクムミはカールスラント軍より一部隊の指揮を任される事となったが、その部隊には少々他の部隊とは編成が異なっていた。

共に闘う事が多いラル中尉とリーケ軍曹に加えて、ハンナ・ドーターマン中尉の航空ウィッチ3名、陸戦ウィッチ4名の計7名とウルリクムミの混成部隊となっている。対外的な意味合いもあって名目上の指揮官はラル中尉であるものの、実質的にこの部隊の指揮官はウルリクムミにあるといてもいい。

何故ならばラル中尉はウルリクムミの指示に従っていたし、他のウィッチ達もそれに異を唱えるようなものはいなかったからだ。

「ラル中尉いいい、作戦の進行状況は如何様になっているのだあああ?」

「今のところは順調といい言いたい所だが……ネウロイ達も此方の

動きを察知したらしい。撤退する市民や護衛部隊めがけて進軍中との観測班から報告があった、このままのルートだとあと5分程で私達と接触するな」

ラルの言葉を聞いて前々から抱いていた疑問を　　ネウロイ達は自己進化しているのではないか？という疑問が確信に変わった。ウルリクムミは最初の接敵以降、敵を知る為にウィッチ達からネウロイの情報を集めていた。

ネウロイ達は常に一定の形という訳ではないらしく、航空戦闘機の時もあれば戦車を模した陸戦型の時もあったそうだ。

戦術面からみれば地形や戦況に応じて適応していると考えられるが…… 戦略的に過去から見直してみると進化しているようなのだ。

（奴らは闘いながら進化しているようだなああ……これは厳しい戦となるだろうっつっ）

現れた当初は正に猪突猛進という闘い方だったらしい。

ネウロイ達は強力なビームと『瘴気』、そして制空権を持っていたからこそ人類に対して侵略し続けられたといえる。

空から降り注ぐビームに対抗する術が少なかった人類が対抗策としてストライカーユニットを開発後、次第に一進一退の戦況になっていった。

そして今はやや人類側が押し返し始め戦況が好転し始めた矢先、ネウロイ達がベルリンを大規模に攻撃した。その際にストライカーユニットの倉庫を優先的に破壊している事から、ネウロイ達はウィッ

手達との交戦を重ねていく事で次第に行動・思考が洗練されていつているのではないかと予測されている。

戦略的に見てもそれは当てはまるらしい……少なくともウルリクム自身はそう考えている。

ラル中尉に訊いた限りではこの世界に現れた最初は無差別に攻撃していたらしいが、次第に軍事拠点・重要な都市を攻撃するようになっていく。先に述べたとおり、ストライカーユニットの倉庫が優先的に破壊された点からもそれが窺えるのだ。

ベルリンに侵攻される前までのネウロイならば優先的に進路上に展開するウィッチ達に攻撃していた筈、それが今回はこちらの最大の弱点ともいえる『数十万を超える避難民』を優先的に攻撃しようとする点からも変化が見られる。

今回の作戦は特に心してかからねばならぬ……と迫りくる敵の事を考えているウルリクムだったが、そんな彼とは対照的に付き従うウィッチ達の表情は明るい。

「結構ネウロイの数も多いと聞いているけど……先手大将が居るから大丈夫だろうなあ……」

「気を引き締めろリーケ。まあ……気持ちは分からんでもないがな」

「下手に緊張するより、気持ちに余裕を持っていた方がいいに決まっていますよ中尉」

すっかり名コンビとなりつつあるラルとリーケの二人は適度な緊張を保ちつつも、他の部隊からは考えられないほどリラックスしている。

彼女達のような落ち着きぶりは共に闘う『巖凱』の存在があるか

らだ。

何せ彼にはビームはほとんど効かない、鈍重そうな見た目とは裏腹に移動も速い、ネウロイを圧倒的する力と戦術眼　それらによって此方が一方的にネウロイ達を蹂躪しているのがここ数日の光景であり、その為には彼がネウロイを蹂躪する様を見慣れて始めているのだ。

また身を挺して自分たちを守ってくれている存在と共に在るという事からも、自然と彼女達の心に余裕が生まれているのだろう。

「……随分『彼』の事を信頼しているのね、二人とも」

大規模な撤退作戦の前線にいるというのに気負う様子の無い二人に特にラル中尉が顕著だった事に　若干呆れ気味に苦笑するハンナ。

彼女は陸戦ウィッチから航空ウィッチに配置返還されてから日が浅いものの、陸戦ウィッチ時代に培われた経験から指揮能力が高い為に陸戦ウィッチが比較的多いこの部隊に配属された。

上層部としては少しでも多くの戦場に航空ウィッチを配置すべく取った人事であったが、彼女自身は噂の『巖凱』と直接会える事の方を喜んでいた。

何せたった数日でネウロイを数十機撃墜、加えてカールスラントの人々から尊崇の対象になった生ける伝説と言ってもいい存在と共に戦えるのだ。

その喜びは間違つてないなかった。彼は話に聞いていた通りの人物であったのだから。

「それはそうさ。ウルリクムミのお陰で随分と余裕を持った撤退作戦になっっているんだからな」

「もし先手大将がいなかったとしたらベルリンどころか、国土そのものが失われてもおかしくない戦況ですからね……」

「無駄話はそれぐらいにしてえええ、迎撃準備をせよおおお」

ウルリクムミの一声にその場にいるウィッチ達に緊張が走り、彼の視線の先を見やると

「そ、空が4分しか見えない……！！！！」

そこには青空うらみを覆い尽くさんとする漆黒の軍勢ぜつぼつ　大挙して押し寄せてくるネウロイ達の群れの姿が在った。

その数は優に150機以上。撤退する軍や避難民に対しては明らかに過剰戦力といえよう。

あまりの数にウィッチ達が怯みそうになる一方で、ウルリクムミはさほど動揺せず泰然自若たる様子でネウロイ達を見ていた。

「……なるほどなあああ、目標を切り替えたかあああ」

「？？どういう事　ッ！」

ネウロイ達の一斉砲撃ひかつのあめが空から降り注ぐが、ウィッチ達を守る様に濃紺色に光り輝く竜巻が吹き荒れ放たれたビームを尽く弾いた。

「血気盛んな事は結構だがああああ……」

竜巻はいつもより広範囲に周囲の瓦礫も巻き込みながら吹き荒れ、濃紺色の光が速度と共に増していき

「数に任せた程度の攻撃でえええ、この『巖凱』が揺らぐものかああああ！！！！」

ウルリクムミが誇る破壊の自在法『ネサの鉄槌』が直撃し、空と陸に居たネウロイ達は為すすべもなく殆どが空に舞い散るダイヤモンドダストと化す。

大型を含めた40機程を一撃で撃墜する光景にウィッチ達は圧倒されそうになるが、ネウロイは怯む様子を見せるどころか、味方の損害を構わずに苛烈な攻撃を仕掛けてくる。目標を殺す。それだけが私達の存在意義だと言わんばかりに。

「ツチ、いつもより熱烈なアプローチだな……」

期せずして『ネサの鉄槌』が闘いの始まりを告げる号砲となり、再び戦闘が開始された。

一進一退の攻防の中、私はネウロイ達を迎撃しながら先ほどの疑問を考えてみる。

（『目標を切り替えた』  
作戦ではネウロイの攻撃目標は避難民と想定されていたけど）

しかし現状では避難民よりもウィッチ達の方に  
特にこの部隊に 攻撃を集中させている。

考えてみればこれほどの数を揃えられるならば、此方には足止め程度の戦力でいい筈である。

もしくは多数の戦力で時間稼ぎをしている間に別働隊で避難民を攻撃すればいい。

それなのに避難民を攻撃するよりも此方に戦力を集中させているという事は……

（まさか、脅威となるウルリクムミから落そうとネウロイが『考えた』のか!?!）

そうでなければ、これほどの数を一部隊にぶつけることなどあり得ない。

防衛線は広範囲に展開されている中で他にも交戦している部隊も在るにも関わらず、ネウロイ達はウルリクムミに対して集中攻撃を仕掛けてくる。

加えてこの部隊のウィッチ達には積極的に仕掛けてこず、彼が現れる前に経験したネウロイとの戦闘と比べると『機会があれば落としておく』程度の攻撃に感じられた。

その事実気付いた瞬間込み上げてくる怒りのあまり、口調が変わっているのを自覚する。

私は感情をギリギリの所で無理矢理に押さえつけようとするが、それも難しいだろう。

なぜならネウロイ達は暗にこう言っているようなものなのだ

『巨人さえ倒してしまえばどうにでもなる』と。

それは私にとって、私達ウィッチにとって屈辱でしかなかった。

「あんまり嘗めてんじやないわよ……リーケ、あのカトンボ共を蹴散らすわよ！！ハンナ、陸上は任せるわ……！！」

私は溢れんばかりに湧き起こる激情のせいで、思わず笑みを浮かべてしまう。

これほど感情が高ぶるのは初めてネウロイを撃墜した時以来だろうか？

（さあ、墮としてあげる……この私が完膚なきまでに貴方達を殺してあげるわ、ネウロイ共！）

視界の端に移るベルリンを焼く焰のような、どうしようもないほど

狂おしく激しく愛おしい感情せんじを胸に秘めつつ私はネウロイに銃口を  
向けた。

### 第三話 ビフレスト作戦 上（後書き）

まさか9件も…お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
います。

仕事やらなんやらで、これからさらに亀更新になること確定です。

r z

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3485v/>

---

ストライクウィッチーズ ~鉄槌を下す王~

2011年10月28日02時18分発行